

龍門文庫藏『春日社家記録』『神木御入洛并御遷座事』をめぐって

礪波美和子

一

「賀茂河の水、双六の賽、山法師。是ぞわが心になはぬもの」と、白河院も仰せなりけるとかや。

『平家物語』巻第一「願立⁽¹⁾」にある有名な一節である。白河院が意のままにならないものとしてあげたうちの一つ山法師は、日吉山王社の神輿を奉じて強訴を繰り返した比叡山延暦寺の僧兵のことである。この比叡山の強訴と並び恐れられたものに、奈良興福寺の僧兵が春日の神木を奉じて行った強訴がある。

『平家物語』巻第五「都帰⁽²⁾」には、

今度の都うつりの本意をいかにといふに、旧都は南都北嶺ちかくして、いささかの事にも、春日の神木、日吉の神輿などいひて、みだりがはし。福原は山へだたり江かさなッて程もさすがとほければ、さ様のことたやすからじと

て、入道相国のはからひいだされたりけるとかや。

とあり、清盛による福原遷都の本来の目的として、「旧都は奈良・比叡山が近く、些細なことにも、春日大社の神木や日吉神社の神輿などを持ち出して騒動になる。福原は山や海でさえぎられて、なんといってもやはり道のりも遠いから、そういうことも簡単にはできない」ことがあげられている。

福原からの都帰が行われた治承四（一一八〇）年、春日の強訴が行われた記録が残っている。

治承四年^{子庚} 十二月十六日動座、同廿一日帰座、廿八日東

大寺・興福寺等悉皆炎上、希代事也、

（神木御動座度々大乱類聚⁽³⁾）

一 治承四年十二月十六日御動座移殿件子細者、御寺炎上之故也、同廿八日御帰座、

（『古今最要抄』第六「神木御入洛并御遷座事」⁽⁴⁾）

一治承四年十二月^(十)□□日御動座移殿件子細者、御寺炎上之故也、同廿八日御^(船)□□、

『春日社家記録』「神木御入洛并御遷座事」⁽⁵⁾

龍門文庫蔵『春日社家記録』には本の小口に欠損があり、文字の半分が見えない部分があるが、内閣文庫蔵『古今最要抄』の記述と一致している。「神木御動座度々大乱類聚」の記述は少し詳しい。いずれも清盛による南都焼討による寺の炎上を記載している。

二

勝野隆信氏は、昭和三十(一九五五)年に『僧兵』⁽⁶⁾で、

山法師が日吉山王の神輿を奉じて嗽訴に及べば、その理の如何を問わず、裁許しなければならなくなり、奈良法師が春日の神木を奉じて入京すれば、藤原氏一門は周章恐怖して、そのなす所を知らなかつたのである。

と述べ、南都の嗽訴の方法について、

神木が本殿から移^(うつし)殿に遷される。これは訴訟の宣言であり、またその示威運動の第一歩でもある。これを御遷座という。

ここで訴えがきかれれば、直に本殿に帰される。これを御^(船)帰座という。

若しきかれなければ、次に興福寺の金堂の前に移される。ここでもまだ許される見込みがないならば、僧徒神人等の大衆はこれを先頭に奉じ、道を京都にとつて大行進を開始し、まず木津まで進んで駐留する。木津は奈良街道が山城へ入った所で、これを御進発という。ここで様子を窺い、裁許いまだしと見るや、一路北上して宇治に至り、平等院に屯する。此処に至つてもなお裁許が下らなければ、いよいよ神木御入洛である。

都に入つた神木の落着く所は、初めは勸学院であつたが、勸学院焼失の後には法成寺の金堂が用いられ、ついで長講堂が之にあてられた。

こうして遷座、進発、入洛と進み、洛中に一応落着いてから最後の段階に入る。関白の邸宅に持込む場合もあるし、禁裏に迫る場合もあり、もつて、藤原氏出身の公卿等を恐懼狼狽せしめることは後述の如くである。

と記している。さらに黒田俊雄氏は、一九八〇年に『寺社勢力—もう一つの中世社会—』⁽⁷⁾で、「大衆僉議・衆徒発向」「嗽訴と

神興・神木」に関して、九条兼実の日記『玉葉』の承安三（一二七三）年七月二一日条など具体例をあげて解説している。

上野麻彩子氏・北村彰裕氏・黒田智氏・西尾知己氏は二〇一一年三月に発表された「神木御動座度々大乱類聚」の翻刻と紹介⁸⁾において、

興福寺の外に目を移すと、強訴の事例を網羅した史料として、「当社御遷坐御進発御入洛御帰座代々日記」（大宮文書、「古今最要抄第六 神木御入洛并御遷座事」（春日大社史料）の存在が勝野隆信氏によってすでに指摘されている。この内、特に「当社御遷坐御進発御入洛御帰座代々日記」は事例の網羅という点では突出していると言えるが、その記事の内容は動座・帰座の年月日、動座当時の事務（別当）名、主な訴訟事項などに限定され、簡潔である点に特徴がある。これに対して、「類聚」は特に中世後期の記事がきわめて詳細である点に特徴を見出すことができる。

と述べ、「興福寺大乘院尋尊が平安期から室町期にいたる春日神木の動座に関する先例を整理した「神木御動座度々大乱類聚」を翻刻、紹介している。

その論文の中で、参考表として「各記録における強訴先例収

龍門文庫蔵『春日社家記録』『神木御入洛并御遷座事』をめぐって

集状況一覧」を掲げ、「年（西暦）・月」・「強訴の形態」に関して、「神木御動座度々大乱類聚」・「大乘院日記目録」・「神木動座之記」（国立公文書館所蔵大乘院文書）・「当社御遷坐御進発御入洛御帰座代々日記」・「古今最要抄第六神木御入洛并御遷座事」（春日大社史料）・「春日神木御入洛年々」（『康富記』宝徳三年九月七日条）の記述の有無をまとめている。

このうち「古今最要抄第六」にある「神木御入洛并御遷座事」と同じ項目を記載するものが、龍門文庫蔵の『春日社家記録』⁹⁾である。参考表「各記録における強訴先例収集状況一覧」に記述のない天仁元（一一〇八）年九月二十九日の遷座・十月七日帰座、久安四（一一四八）年八月三日遷座・二十一日帰座、仁安二（一一六七）年五月十三日遷座・二十日帰座、建治二（一二七六）年六月八日動座・十月十日帰座が載っている。

三

龍門文庫蔵の『春日社家記録』は、『国書総目録』¹⁰⁾に、「春日社家記録けさうき」一冊（類神社）¹¹⁾龍門（室町末期写）とのみ載る。川瀬一馬氏の『龍門文庫善本叢刊』¹²⁾に、

二〇六 春日社家記録

二ノ一冊

室町末期写。毎半葉十行書写。字面の高さ約六寸八分。春日社家の記録を清祓事寛仁より貞治に至る・神殿御灯呂懸落御事文政二年・放氏事正和至・神木御入洛并御遷座事寛仁至・社頭并興福寺閉門事安貞至・神主正預職兼帶事時益・社頭并興主職兼帶事信近・正預若宮神主職兼任事祐房・着到事建武五年・神人等訴訟之時清祓社家支配事至徳三年に類聚して、記録し、時に古文書を掲げてある。寛仁年中より寛正三年頃までで止つてゐるから、本書は寛正三年後、間もない頃に録せられたものを、後に伝写したものである。

本文墨附六十六葉。裏打改裝。有不為斎文庫旧蔵。

と記されるもので、春日社の社家の記録である。見返しに本文別紙の楮紙が貼り付けられ、「清祓事／神殿御灯呂懸落御事／放氏事／神木御入洛并御遷座事／社頭并興福寺閉門事／神主正預職兼帶事／正預神主職兼帶事／正預若宮神主職兼任事／権官社務代勤仕事／朔旦（マ）冬至事／着到事／神人等訴訟之時清祓社家支配事」という目次がある。この項目に類聚して記録している。外題中央に「春日社家記録」と直書、内題は、見返しに「春日社家記録」とある。六十六丁。資料サイズは縦二十五・

○センチメートル、横十九・一センチメートルである。表紙に「有／1182」と印字された図書ラベルが貼られている。

「有不為斎文庫」は反町茂雄氏の『鬼書家 業界 業界人』¹²⁾で、大阪有不為斎文庫 六月。幕末・明治初めごろの京都の優れた儒者伊藤介夫の旧蔵書。（中略）儒学・漢文学関係の古版・古写本を中心にした本格的な蒐集で、格調の高い点では、前後に比類の少ない立派なコレクション。

と評される懷徳堂門人の伊藤介夫（一八三三～一九二二）の蔵書である。昭和十四（一九三九）年六月に売り立てが行われた。

その際の『有不為斎文庫善本入札目錄』¹³⁾に、「三六三 春日社家記録 写一冊／古写」と記されている。

春日社に関する古記録類を集成した『古今最要抄』^{年記事}の第六（国立公文書館内閣文庫蔵）¹⁴⁾には、「当社御造替事始并造国司事／神殿御灯呂懸落御事（神人）／放氏事／神木御入洛并御遷座事／寺社閉門事／神主正預職兼帶事／正預神主職兼帶事／正預若宮神主職兼帶事／権官社務代勤仕事／朔旦冬至事／着到事／神人等訴訟時清祓物社家支配事（神人）」がある。目次にある「寺社閉門事」は挿入で、「●社頭并興福寺閉門事」と書き入れられるのみで本文がない。挿入で「奥ニ有」と記述され第六末尾に記されている

記述や、書き入れがなされている記述が『春日社家記録』と一致している。内閣文庫蔵『古今最要抄』第六の「神木御入洛并御遷座事」では、承安元（一二七二）年と同二（一二七三）年が「奥二有」と記述され、本文は第六末尾に記されている。

龍門文庫蔵『春日社家記録』では、「寅刻」・「寅剋」が、「刀刻」・「刀剋」となっている。この字体が「寅」を表すことは、「神主正預職兼帶事」の中で「天仁三年^{庚刀}」（一二一〇年・44オ）・「長承三年^{甲刀}」（一一三四年・44オ）・「嘉応二年^{庚刀}」（一二七〇年・44ウ）など干支の「庚寅」「甲寅」にこの字を用いていることから明らかである。内閣文庫蔵『古今最要抄』第六では「寅」の字となっているが、末尾に別筆で記される承安元年の記事は、「刀」となっている。「刀」の読みの「と」からくる略字と考えられる。

内閣文庫蔵『古今最要抄』第六は建暦三（一二二三）年から文永元（一二六四）年の記述が遷座・帰座の年月日のみになる。そして建治元（一二七五）年から寛正五（一二六四）年までの記述はなく「一 此間九枚入へし」という書き入れがある。龍門文庫蔵『春日社家記録』の建治元年から寛正五年までの記述は28オから36オまで九枚あり、これに相当する。龍門文庫蔵『春

日社家記録』そのものか、もしくは親本にあたるものが校合史料として用いられたのではなからうか。

四

龍門文庫蔵『春日社家記録』の「神木御入洛并御遷座事」の箇所（23オから36ウ）を翻刻するとともに、年月日・強訴の形態・場所・備考を表にしたものを末尾に掲げる。

保延三（一二三七）年二月八日に、「金堂前樂人始而奏乱声」と、金堂前にて樂人が乱声を奏でることが始めて行われたことを述べた上で「件子細」が記される。永万元（一一六五）年九月一日には「今度始也」（25オ）という小書きの記述があり、応安四（一二七四）年十二月一日には「四ヶ年御在洛今度始也」（32オ）という記述がある。

承安三（一二七三）年十一月七日には「春日祭延引」（26オ）と、春日の祭りが延引されたことが記されている。また、「例」にこだわった記述に、建保二（一二二四）年八月十六日「御供等如例」（27オ）、嘉禎元（一二三五）年十二月二十五日「料理以下如例」（27ウ）、嘉禎二（一二三六）年七月二十八日「任例」（27ウ）、宝徳三（一二四五）年八月二十九日の「移殿料理事」中

の「移殿拵事」の中に「先例也」(33ウ)、寛正四(一四六三)年十二月二十二・二十三両日の沙汰「移殿料理事」の中に二箇所「先例也」(35オ・35ウ)がある。

「神木御入洛并御遷座事」は康暦二(一三八〇)年の後、宝徳三(一四五二)年まで記述がない。室町時代中期の外記局官人で学者の中富康富の日記『康富記』⁽¹⁶⁾の宝徳三年九月七日条に、此外神木途中御帰座并動座年々是繁多歟、不遑于記、至御入洛者、康暦以後無其例、

と康暦の後、御入洛の例がないことを記す。七日の記事は、

七日壬寅 晴、是日自武家被遣使節於南都、依神木入洛之有聞也、(中略)或語云、二条殿^{右大臣殿持通卿}神木御動座之間、避母屋有御坐庇云々、中御門大納言^{宗繼卿}同如此云々、其外諸家之様未定云々、或御入洛以後事也、御動座之時如此之由無慥所見歟云々、

と書かれた後、「神木入洛年々不審之間、注一紙遣或方了」として「春日神木御入洛年々」が、寛治七(一〇九三)年から康暦二(一三八〇)年まで列記されている。

『公卿補任』⁽¹⁶⁾の宝徳三年の項には、

関白 従一位 一条 藤兼良 五十

右大臣 従一位 ^{二条}同持通^{三十一}
権大納言正二位 ^{松本}同宗繼^{二十五} ○白馬内弁。

と記されており、神木御動座の間、藤原氏である右大臣と大納言の二人が、母屋を避けて庇にいらっしやったことがわかる。その外の諸家がどの様にしていたかまだ定かではないと述べている。また、この対応は御入洛以後のことで、御動座の時にはこのような対応は確かな所見はない旨、記している。

七十一年間御入洛の例がなかった後の宝徳三年と寛正四(一四六三)年の記述は、『春日社家記録』「神木御入洛并御遷座事」においても、特に「移殿料理事」について詳細で、動座・帰座、動座・閉門の記述の後、重ねて移殿のしつらえに関して、誰の沙汰かまで、詳述している。

「移殿料理事」に関しては、太政大臣洞院公賢の日記『園太暦』⁽¹⁷⁾の貞和四(一三四八)年六月八日の条に、

^{春日神木動座、移殿料理事}
寺訴事条々雖執申候、不事行候之間、可及神訴、就其者可料理移殿之由、衆徒相触候之間、任先例料理移殿了、返々驚存候、仍為御不審、忿馳申入候、以此旨可有御披露候、恐々謹言、

六月八日酉刻

春日神主師俊

謹上 宮内大輔殿

という記述があり、「先例に従って移殿の設営が終わった」ことが記載されている。

『太平記』⁽⁸⁾ 卷三十九「神木入洛長講堂御座の事」には、貞治三（一二六四）年十二月の神木入洛に関して、

嗽義^{がうぎ}の若輩、氏人の国民等、春日の神木を飭り奉り、大夫入道道朝の宿所の門前に振り捨て奉り、その日やがて勅使参向して、神木をば長講堂へぞ入れ奉りける。天子自ら玉辰^{ぎよく}を下りさせ玉ひて、常の御膳を降され、撰家皆高門を掩うて、日の御供を奉られけり。

と、「天皇みずから玉座をお下りなされて、日常の御膳を差し上げなさり、撰関家ではみな大きな門を閉じて、神木に天皇がとる毎日の食事をお供え申しあげた。」と記されている。このように、神木入洛後、藤原氏の者は春日の神を敬い、普段とは違う生活を余儀なくされていることが記される。その後、

三箇年^{さしお}まで閣^{さしお}かれければ、（中略）神訴徒らに歳月を重ねぬれば、あさましき事かなと、諸人上下ことごとく申し沙汰して過ぎけるところに、貞治四年十月三日、尾張大夫入道道朝の宿所、七条東洞院なりけるが、俄に火事出で来て、

龍門文庫蔵『春日社家記録』『神木御入洛并御遷座事』をめぐって

家中ならびに財宝ども、一塵も残らず焼失しければ、すはやこれこそ春日大明神の御祟りよと、云ひ沙汰せぬ人もなかりけり。（後略）

と、三年間も放っておかれ、神木を押し立てての訴えも効なく年月を重ねていったので、嘆かわしいと身分の上下にかかわらず話していたところ、（河口庄を横領していた）道朝の宿所が火事で焼けてしまったため、「これこそ春日大明神の御祟りだ」と噂されたという。でも、道朝は、焼けたのを物ともせず、三条高倉に邸を新築したと話しは続く。藤原氏と関係ない武将には、神木御入洛も効果がなかった。卷四十「神木御帰座諸卿供奉の事」には、二年後の貞治五（一二六六）年八月十二日に長講堂の南庭にて行われた神木御帰座の儀式が詳しく記されている。その中で、

今度は何よりも藤氏の卿相雲客奇麗を尽くし、神行に供奉せらるべしとその沙汰ありしかば、將軍を始め奉り、武家の大名、洛中の貴賤、棧敷を打ち連れて、これを拝し奉る。（中略）神主を始めとして神官ども、束帯にて御神木を捧げ奉る。（中略）衆^{きみびや}かに辺りを払ひて目を驚かす。（中略）何れも善を尽くし美を尽くし、今日の壮観を事とせり。

と、「今回は他の時よりも藤原氏出身の公卿・殿上人は美しい服装をして神の臨行に供としてお仕えるようにとの通知があった」ため、きらびやかな装束で行進し、すべての者たちが可能ながざり美しく飾り立てたことが記されている。

藤原氏出身の者にとっては、神木入洛というのは一大事であり、神木御帰座に際しても、儀式が盛大に行われたことが、わかる。これらは、先例にならって執り行う必要があったため、御入洛の記事がまとめられたものの一つが、龍門文庫蔵『春日社家記録』『神木御入洛并御遷座事』であったと考えられる。

注

- (1) 新編日本古典文学全集45、小学館、一九九四年。引用のふりがなは一部にとどめた。用例検索にジャパンナレッジと東京大学史料編纂所の大日本史料総合データベースを利用した(以下、同)。
- (2) 注1に同じ。
- (3) 『早稲田大学高等研究所紀要』3 「神木御動座度々大乱類聚」の翻刻と紹介、二〇一一年三月
- (4) 古今最要抄二(第八)(古2444.3)。奈良県図書館の複製原本(ふるさと/75.955/カスカ)により、読点を私に付した。

- (5) 奈良女子大学附属図書館、阪本龍門文庫善本電子画像集 <http://mahoroba.lib.nara-wu.ac.jp/x/05/html/206/> にカラー影印あり。読点を私に付した。
- (6) 日本歴史新書、至文堂、一九五五年。一九六六年の増補版は索引あり。割注は省略し、私に傍線を付した(以下、同)。
- (7) 岩波新書117、岩波書店、一九八〇年
- (8) 注3に同じ。
- (9) 注5に同じ。
- (10) 『国書総目録』2、岩波書店、一九六四年
- (11) 阪本龍門文庫、一九八二年。新字体に変更した。
- (12) 八木書店、一九八四年
- (13) 大阪古典会、一九三九年
- (14) 注4に同じ。傍線元のまま。東京大学史料編纂所HPによると、春日大社所蔵(社一六七)に『古今最要抄』全八冊あり。但し、「全体に虫損甚しく、開けない箇所がある。未見。
- (15) 増補史料大成、臨川書店、一九六五年
- (16) 新訂増補国史大系55、公卿補任第三篇、古川弘文館、一九三六年
- (17) 史料纂集、続群書類従完成会、一九七一年
- (18) 新編日本古典文学全集57、小学館、一九九八年

神木御入洛并御遷座事

一寛仁元年六月廿二日^{亥刻}、依衆徒訴訟神木着御大極殿廊、則
寺訴成并間、次日御帰座、

一治暦二年正月七日御進発在之、仍東大寺興福寺藥師寺衆徒供
奉之、去年十二月晦日、召三三会已講良尊被漏之間、衆徒等
去夜細殿ニ有集会及訴訟、今日着御平等院可被成律師之由、
被仰下^{云々}、仍九日御帰座、

一寛治七年八月廿六日、御進発在之、神人金武於当社領近江国
市古庄為序目代藤原延行被陵礮期也、訴訟成并之間、同廿八
日御帰座、(丁234)

同年十二月御入洛 大和守頼親訴訟故也、

一康和五年三月廿九日御進発 着御勸学院件子細者、長史停止
訴訟之故也、

一天仁元年九月廿九日^{子刻}御遷座興福寺金堂前訴訟成并間、十
月七日御帰座、

一天永四年後三月十九日^{刀刻}^(寅)御遷座被補他寺僧円清於清水寺別
当之故也、同廿日御入洛、入御勸学院、同廿二日御帰座、

一永久四年五月十二日御遷座、讃岐守藤原頭能顛倒当寺領讃岐
庄故也、(丁235)

龍門文庫藏『春日社家記録』「神木御入洛并御遷座事」をめぐって

一保安元年八月廿三日御進発在之、和泉守源雅隆当社散在神人
末光得守等打擲之故也、今日伏見寺御一宿、次日着御勸学院、
廿四日国司雅隆停任在庁季俊被禁獄間、則御帰座、

一保延三年二月八日^{酉刻}御遷座、金堂前衆人始而奏乱声件子細
者、正月十八日醍醐座主權僧正定海超当寺別当權僧正^{亥一寛}

被補正僧正之故也、九日着御平等院、十日入洛着御勸学院、
十一日^{亥刻}被停廢定海被補当寺長史於正僧正之由、被宣下

畢、仍十二日御帰座、

一同五年三月廿六日^{午刻}衆徒參向社頭奉成御遷座其子^(丁244)
細修学者延^(寅被殺)害事、称別当^{隆覺}所為修理目代以下坊焼払

畢依之、別当被経、奏聞被召張本故也、木津仁御一宿、廿

七日着御平等院北門、廿八日御帰座、

一久安元年七月十二日為金峯山発向御遷座大將軍上座信実件子
細者、去四月廿七日小嶋谷鐘金峯山僧等引取^{云々}

一同四年八月三日^{刀刻}^(寅)御遷座件子細者、別当大僧都覺晴入滅之
後三ヶ年之間、不被補別当而以上座信実可令寺務之由、被仰

下故也、次着御平等院北門、則可有御入洛之处、夜半大雨大
風過法之間御延引、五日於稲荷伏拜仁奉安之、賀茂川依為大

水社司等奉抱御鉢乘舩渡也、神人等^(丁245)以馬渡也、衆徒

等九条口仁集会也、惣行烈着御勸学院以法印隆寛可被補別當之由、被仰下之間、同廿一日子刻御帰座、

一永万元年九月一日御遷座移殿今度始也、為延曆寺惠僧等、去月十六日依焼弘清水寺為彼寺発回也、十月十六日入御泉木津、廿四日着御多可飯殿以寺工被造之、付檢非違使被責出張本隆被流罪南都衆徒猶貽墳及神木御入洛、同廿六日置古僧（今古僧）供於金堂以其一牖每年可被補僧綱之由、依被仰下御帰座、別當僧正御房尋一範、以下僧綱等被参向送野辺（於東）御門舞人打一敲於社頭奏乱声、（丁25）

一仁安二年五月十三日（寅）刻衆徒参向社頭為御出門奉成御遷座於移殿、去三月十日夜前別當僧正御房惠一信入夜打天、依焼失松室円城房喜多院等可被配流被僧正御房之由、隆訴申、無御裁許之故也、同十七日可被流罪之由、被仰下也云々、同廿日戌刻御帰座、

一承安元年九月十一日（寅）刻御遷座件子細者、御寺修理并当社領伊賀国大野木庄御供田三町八反同国住人大江負成押領之間、衆徒度々隆経、奏聞御成段遅引故也、着御平等院之刻不可有社領相違於負成者被禁獄之由被下、院宣止件負成之私領、可被没収大和国目安庄（丁25）被下、長者宣仍十月四日御

帰座、

一同二年十二月廿日御遷座移殿、同廿五日着御隆興寺前飯殿、廿六日入御平等院衆徒訴訟三ヶ条各神人陵礫故也、御裁許間、廿八日御帰座、

一同三年十一月三日奉成御遷座職掌等奏乱声着御泉木津（尋一本）、六日御入洛平等院件子細者、依多武峯焼弘科法務大僧正御房尋一範、解官并張本十人被撰召之故也、官兵引宇治橋、同七日春日祭延引、十日夜可有裁許之由、被下院宣長者宣間御帰座、於東御門打一鼓、

一治承四年十二月（十六）日御動座移殿件子細者、御寺炎上之（補座）故也、同廿八日御（寅）、

一建仁元年九月卅日衆徒参向社頭奉勸御遷座於金堂前、十月九日御帰座、

一建曆三年十一月一日（寅）刻御動座移殿件子細者、清水寺与延曆寺末寺清閑寺相論之故也、同十四日（未刻）着御泉木津、同十六日着御平等院北門被下、綸旨云座主公縁解畢律師一人法橋一人已講一人僧都一人被配流云々、依之同十九日御帰座、廿日（辰刻）着御本社、

一建保二年八月四日（寅）刻衆徒参向社頭奉成御遷座、於移殿樂所

一者光真等奏乱声、同十六日^{戊刻}遷御于金堂前^{〔26〕}御供^{〔イマホク〕}等如例、并院權別当大僧都藏俊之墓所仁被顛權僧正亦清水寺隆円五智院可為清水寺領由被^{〔イマホク〕}宣符宣上被下^{〔イマホク〕}偷^{〔イマホク〕}伽論於当寺可被寄進宇陀郡三ヶ庄之由、依被仰下、同廿四日^{刀刻}御帰座、

一安貞二年五月十日^{刀刻}衆徒參向社頭御動座移殿件子細者、依多武峯焼失事中僧正御房^{実一尊}御寺務解官之間、為門門也、同廿七日^{戊刻}社頭門別当御還補御寺修理事被仰下之間、八月十三日御帰座、

一文歷二年七月廿七日^{戊刻}御動座移殿件子細者、当寺領大隅庄神人延国^{□□}為八幡宮領薪庄民等搦捕之故也、訴^{〔27〕}訟成弁之間、翌日廿八日^{子刻}御帰座、

一嘉禎元年十二月廿一日^{酉刻}進発泉木津件子細者、依大隅庄与薪庄堺相論事為薪庄民等大隅庄神人被刃傷之故也、

同廿五日^{申刻}着御平等院北門料理以下如例、

同二年二月廿一日御帰座、仍社頭開門去正月二日開門也、

同七月一日依不達日来之訴訟問、又社頭開門、

同廿八日御遷座金堂前衆徒雖被參向、依開門不被鳴貝、但於南門之外、被勤々時神人開門、沙汰衆着座舞殿任例而勅仁

合議於被授畢、

同年十月廿八日社頭開門、^{〔27〕}

同年十一月二日御帰座、同廿九日被召立当国地頭

一正喜^{〔イマホク〕}元年五月十一日御動座移殿、当寺領吹田庄訴訟也、

同七月五日御帰座、

一文永元年七月二日^{亥刻}御動座移殿当寺領合河庄下司訴訟之故、

八月二日御遷座金堂前、同年九月廿一日御帰座、

一建治元年五月十五日^{亥刻}御動座移殿当寺領神崎逆田庄地頭訴訟之故也、同六月廿二日遷御金堂前八月廿一日^{戊刻}御帰座、

同二年六月八日御動座移殿当国住人高王四郎宗魚流罪遅々并去年御^{〔船座〕}權別当未被補之又三面僧坊^{〔所〕}^{〔28〕}神崎

庄顛倒故^{□□}、同十月十日御帰座、

一弘安元年七月十日^{辰刻}料理移殿、同廿二日^{戊刻}御動座移殿、同

廿七日御帰座、

一同四年九月廿五日^{戊刻}御進発泉木津件子細者、当寺領大隅庄神人時景於薪庄民依搦捕可被断罪件下手人等之由訴申也而

処断遅引之故也、同十月二日^{子刻}着御宇治平等院北門、同四

日着御稲荷社、同六日遷御法成寺、翌年十二月廿一日御帰座

一正応四年正月十七日御遷座金堂前^{沙汰}學侶衆徒吉田庄伝教院領等事

也、同十九日欲有御_レ歸座之處、惣衆徒依当寺造〔385〕
 遲々間抑留、即十九日進_レ發泉木津、同二月廿三日 御_レ歸座、
 一同年十二月廿七日御_レ遷座移殿、同五年正月十三日着御_レ金堂前
 当寺造營并河口庄等事也、同四月廿一日御_レ歸座、

一 永仁二年十月五日為西院衆徒沙汰奉取神_レ鏡奉入泉木津、同三
 年五月四日御_レ歸座、

一 同年十一月廿日 法皇御幸、廿六日還御之刻、并院衆徒打入
 社頭奉取三四御_レ殿神_レ鏡奉安置放光院、後日天滿社前立_レ飯殿也、
 神人守職一二御_レ殿神_レ鏡奉取也、寺中衆徒奉安置金堂□□□神_レ
 鏡、同夜奉入金堂前畢、同五年〔386〕八月廿一日_{刀刻}自寺
 中御_レ歸座、同日_{巳刻}自放光院御_レ歸座、衆徒開眉_{云々}、

一 正安三年四月五日御_レ遷座金堂前当国惡党廿人断罪事也、同九
 月卅日御_レ歸座、

一 同四年三月十五日御_レ遷座金堂前、四月廿六日進_レ發泉木津、同
 六月廿九日御_レ歸座、

一 乾元々々年十二月廿九日御_レ遷座移殿、同二年正月十九日御_レ歸座、
 一 嘉元々々年八月十八日御_レ遷座移殿一切經供米山僧点定之故也、
 同九月十四日顯俊侍從阿闍梨流罪之由被仰下之間、則日〔389〕
 御_レ歸座、

一 德治二年十二月十二日御_レ遷座泉木津、同十五日着御_レ平等院、
 同廿日御_レ入洛入御_レ法成寺金堂前件子細者、近江国鯉江庄事并
 平田庄政康総地頭達磨寺仙海法師可被遠流之由事、同三年七
 月十二日御_レ歸座、

一 正和元年四月十三日御_レ動座移殿、同十九日着御_レ金堂前、同八
 月廿一日進_レ發泉木津、同廿三日遷御_レ平等院、同廿五日_{未刻}御_レ
 入洛、同戊戌着御_レ法成寺峯寺訴訟事也、八月十六日御_レ歸座、

同三年三月十一日御_レ遷座金堂前、同十三日遷御_レ泉木津、同十
 〔390〕四日御_レ進發平等院、同十七日御_レ入洛、但自今月八日
 三十ヶ日法成寺触穢之間、南大門前ニ儲_レ飯殿奉安置之後、三
 月十日遷御_レ法成寺金堂前、同三年八月十四日御_レ歸座、

一文保二年七月十二日_{子刻}御_レ遷座移殿、同十三日御_レ歸座、
 一元応二年二月十四日 御_レ動座移殿、同三月十二日御_レ歸座、

一元 享 元年八月六日御_レ動座移殿、同廿二日御_レ歸座、
 一 正中二年六月廿四日_{戌刻}御_レ遷座金堂前、同十二月十五日御_レ歸
 座、

一 嘉曆二年八月廿二日遷_レ座泉木津、同九月十二日御_レ歸座、
 一 建武二年六月廿日進_レ發泉木津、同七月十一日御_レ歸座、
 一同三年十一月 御_レ動座移殿、同十二月廿六日御_レ歸座、〔394〕

一 曆応二年十一月九日御動座移殿、同廿二日遷御 金堂前、同三年六月十九日御帰座、

一 曆応三年十月廿三日進発泉木津、同十二月十三日着御平等院、同十九日御入洛着御下長講堂号六条殿当国々民西阿法師当寺社領押妨就中維摩大会料所大仏供庄以下□貢一向抑留之故也、寺訴成并西阿嫡子木工助以下為武家被打取之間、同四年八月十九日御帰座、

一 康永三年十一月十八日遷座金堂前、同四年四月十六日進発泉木津、同六月廿一日着御平等院寺訴三ヶ条也、出打段米好専法眼一切経供□等事云々、寺訴条々開眉之間、七月〔314〕十九日御帰座、

一 貞和三年七月二日御動座移殿、同四年正月十二日御帰座、
一 貞和四年戊子七月八日御動座移殿、同八月二日子刻御帰座、
一 文和四年九月六日依寺訴御動座移殿、江州寺領等事也、翌年正月十二日御帰座、

一 延文元年七月十二日御遷座金堂前坪口河口両庄守護盜妨之故也、翌年三月四日御帰座、

一 貞治三年甲辰十一月十五日御遷座移殿、同十二月十九日着御平等院、同廿一日着御 長講堂六条殿当社御造替遅々間、及

大訴者也、同五年八月十二日御帰座、十三日着御本社、〔315〕

一 応安四年辛亥十二月一日自社頭直御入洛経西路大渡橋着御長講堂、同七年十二月十七日 御帰座四ヶ年御在洛今度始也、

一 永和三年丁巳九月廿六日亥刻俄神木御進発平等院、其故者覺家西南院円兼東北院依遂講前後相論去々年永和元冬比確執在之、両方引級六方之間、合戦及度々畢、依西南院方為六方奉勸神木、同廿七日辰刻着御平等院、同年十一月廿六日自宇治殿御帰座、

一 永和四年戊午十月九日御遷座金堂前、其故者当国寺社領国民等押□□州寺社領守護押妨等事也、翌〔324〕年康暦元年〔325〕八月十三日御進発平等院、十四日辰刻着御同已剋、出御平等院、未刻着御于長講堂六条殿、康暦二年庚申十二月十五日戌刻出御六条殿、同丑刻着御平等院、十六日午剋出御平等院、同亥刻着御本社、

一 宝徳三年辛未九月二日御動座移殿兵庫閑訴訟等也、同廿四日御帰座、
移殿料理事

八月廿四日事始遂行之寺門番近参テ致其沙汰畢
同廿九日移殿拵事

東面四間之内北間神主時益
南正預祐憲材木ハ兩勅印出也、接近ハ寺工役也、

(324)

御供 瓶子兩勅印ヨリ下也、

南方一間 權神主家徳与權預延祐

西方四間之内

南一間 新權神主家久与末補權侯二人合

次一間 權預祐識 神宮預秀泰 加任預祐文 ヌ三人合

次一間 權預祐豐 權預祐仲 次預延雅 ヌ三人合

次一間 若宮神主祐村

材木各出也、接近各出也

一御簾懸并御灯呂懸竹二本、兩勅印出也神主二本 正預一本

一翠簾疊ハ御八講□時也、仍自御倉（兼也）□□出也、神前翠簾（ 33 ）

ヌヒモ八講屋古□□□先例也、

一御床 御壁代薦ハ兩勅印出也

一御棚ハ兩勅印沙汰也、 若宮御分 彼神主沙汰也

一御灯呂ハ東西ノ御廊灯呂二基 若宮方三十八所社灯呂也、御

油ハ常住等役也、

一四ヶ所遺戸ノ口ニハカヤスタレ一枚宛懸也、

一床ハ修理目代役也、 一間床十五枚

斗料理如斯

一九月二日御動座移殿

同廿四日社頭開門畢 兵庫閑事落始也、長間寺発向、(334)

未落居依之、寺門ハ不及開門、

同日廿四日戌刻御帰座、

十一月十九日寺門開門畢 十九日 長間寺発向也、

一寛正四年癸未十二月廿四日御動座移殿兵庫閑訴訟也、

去十二日七大寺開門、昨日廿三日社頭開門也、

移殿料理事、廿二三両日沙汰也、

東西四ヶ間之内

北二間ノ内北ノ一間遺戸戸口南戸尻張板北北ニ二間張板立

縁五（兼）□□柱副テ三戸ロニ萱簾一□□神主家徳沙汰也、(344)

次二間之内北□□三□張板立縁五北ヨ□□遺戸戸口南

戸尻張板南萱簾一枚 ヌ正預延祐沙汰也、

ヌ兩勅印分ハ材木釘等ヲ兩勅印ヨリ出テ寺門接近役ニ

テ張板遺戸以下悉皆致其沙汰也、仍兩勅印□□朝夕

酒三盃新水宛下行也、

南方一間張板ヲチ五權神主家久 權預祐識持也、

西方四ヶ間之内

南ヨリ一間戸尻張板等ヲ立鴨居同上ノカヘ板新権神主時勝沙汰也、遺戸柱ヨセ敷居萱簾ハ加任預祐文沙汰也、〔

34ハ)

次一間張板立縁五権預祐仲 次預延□権預祐前拵也、

次一間張板立縁五権預延盛権預祐風神主預祐松拵也、

次一間遺戸戸口南戸尻北張板萱簾等若宮神主祐勝拵也、

此遺戸ハ先年御遷宮ノ時ノヲ里ノ館ニ清浄ニ取置テ今度立也且先例也、但フスホリテワルシ

権官并若宮神主分ハ材木釘接近以下面々私之沙汰也、

一神木安置御床本社分二間渡ノ三寸マノ板一枚宛両勅印出テ板ノ間ヲ三寸アケテ用意之神木ノ御本ヲ為奉入也御床ノ高サ

正預分板俄無□□一間板ヲ一枚ツキテ〔35ハ)沙

汰也、寺門接近□□向也、若宮御分□□□沙汰也、

一御床ノ上ニ御座料ニアラ薦ヲ敷也、御壁代ニモ薦ヲ立也、若宮ハ彼神主沙汰也、

一御簾懸ノ竹一本御灯懸竹一本合二本神主出也、神戸四ヶ口所色々竹也□□ 若宮彼神主出也、

一御廊ト社家トノ間御簾懸ノ竹一本正預出也、若宮ハ彼神主沙

汰也、

一神前翠簾ハ八講屋ノ古物也、先例也、御廊ト社家トノ間、翠簾モ八講屋也、畳モ八講屋也、仍御倉ヨリ承仕出也、移殿マテハ宿直人運也、〔35ハ)

一移殿ノ床ハ修理目代供也一間床十五枚 今度二間床送進之間、敷様不審也八脚送也、此外合議床一帖送也、

御前四脚 東面ハ二脚宛二通 若宮ノ御前マテ

御廊四脚 東西行北ニ一通 南壁副テ一通

一畳事

御前六帖 一通四帖 一通二帖ノコリニハ円座ヲ敷也

御廊八帖 一通〔36ハ)

寛正五年^{甲申}卯月十三日 御飯座、〔36ハ)

〔付記) 翻刻に際し、読点・傍記を私に付した。また、小口の欠損部分や虫損は□で表した。貴重な蔵書の翻刻掲載を御許可下さった公益財団法人阪本龍門文庫の方々に、末尾ながら御礼申しあげます。

——となみ みわこ・本学助教

年月日	年(西暦)月日	強訴の形態	場所	備考
寛仁元年六月廿二日亥刻	1017年6月22日	着御	大極殿廊	神木
次日	1017年6月23日	御帰座		
治暦二年正月七日	1066年1月7日	御進発		
去年十二月晦日	1065年12月30日			訴訟
今日	1066年1月7日	着御	平等院	
九日	1066年1月9日	御帰座		
寛治七年八月廿六日	1093年8月26日	御進発		
同廿八日	1093年8月28日	御帰座		
同年十二月	1093年12月	御入洛		
康和五年三月廿九日	1103年3月29日	御進発	着御勸学院	訴訟
天仁元年九月廿九日子刻	1108年9月29日	御還座	興福寺金堂前	訴訟
十月七日	1108年10月7日	御帰座		
天永四年後三月十九日寅刻	1113年閏3月19日	御還座		
同廿日	1113年閏3月20日	御入洛	入御勸学院	
同廿二日	1113年閏3月22日	御帰座		
永久四年五月十二日	1116年5月12日	御還座		
保安元年八月廿三日	1120年8月23日	御進発	伏見寺御一宿	
次日	1120年8月24日	着御	勸学院	
廿四日	1120年8月24日	御帰座		
保延三年二月八日酉刻	1137年2月8日	御還座	金堂前	衆人始而奏乱声
九日	1137年2月9日	着御	平等院	
十日	1137年2月10日	入洛	着御勸学院	
十一日亥刻	1137年2月11日			宣下
十二日	1137年2月12日	御帰座		
同五年三月廿六日午刻	1139年3月26日	御還座	木津、御一宿	
廿七日	1139年3月27日	着御	平等院北門	
廿八日	1139年3月28日	御帰座		
久安元年七月十二日	1145年7月12日	御還座	金峯山発向	
同四年八月三日寅刻	1148年8月3日	御還座		
次	1148年8月	着御	平等院北門	
	1148年8月	則可有御入洛		大雨大風・延引
五日	1148年8月5日		福荷	
	1148年8月	着御	勸学院	
同廿一日子刻	1148年8月21日	御帰座		
永万元年九月一日	1165年9月1日	御還座	移殿	今度始也
去月十六日	1165年8月16日			焼払清水寺
十月十六日	1165年10月16日	入御	泉木津	
廿四日	1165年10月24日	御入洛	飯殿	神木
廿六日	1165年10月26日	御帰座		
仁安二年五月十三日〇(辰)刻	1167年5月13日	御還座	移殿	
去三月十日	1167年3月10日			夜打・焼失松室円城房 喜多院等
同十七日	1167年5月17日			流罪
同廿日戌刻	1167年5月20日	御帰座		
承安元年九月十一日寅刻	1171年9月11日	御還座		
		着御	平等院	院宣・長者宣
十月四日	1171年10月4日	御帰座		
同二年十二月廿日	1172年12月20日	御還座	移殿	
同廿五日	1172年12月25日	着御	隆興寺前飯殿	
廿六日	1172年12月26日	入御	平等院	御裁許
廿八日	1172年12月28日	御帰座		
同三年十一月三日	1173年11月3日	御還座	泉大(ママ(木))津	
六日	1173年11月6日	御入洛	平等院	
同七日	1173年11月7日			春日祭延引
十日	1173年11月10日	御帰座		裁許/院宣・長者宣
治承四年十二月〇〇(十六)日	1180年12月(16)日	御動座	移殿	御寺炎上之故也
廿八日	1180年12月28日	御〇〇(帰座)		
建仁元年九月卅日	1201年9月30日	御還座	金堂前	
十月九日	1201年10月9日	御帰座		
建暦三年十一月一日寅刻	1213年11月1日	御動座	移殿	
同十四日未刻	1213年11月14日	着御	泉木津	
同十六日	1213年11月16日	着御	平等院北門	
				繪旨/配流
同十九日	1213年11月19日	御帰座		
廿日	1213年11月20日	着御	本社	
建保二年八月四日寅刻	1214年8月4日	御還座	移殿	
同十六日戌刻	1214年8月16日	還御	金堂前	御供等如例/官符宣
同廿四日寅刻	1214年8月24日	御帰座		

年月日	年(西暦)月日	強訴の形態	場所	備考
安貞二年五月十日寅刻	1228年5月10日	御動座	移殿	多武峯焼失ノ間門
同廿七日戌刻	1228年5月27日			社頭間門ノ仰下
八月十三日	1228年8月13日	御婦座		
文暦二年七月廿七日戌刻	1235年7月27日	御動座	移殿	
翌日廿八日子刻	1235年7月28日	御婦座		
嘉禎元年十二月廿一日酉刻	1235年12月21日	進免	泉木津	料理以下如例
同廿五日申刻	1235年12月25日	着御	平等院北門	開門ノ去正月二日間門
同二年二月廿一日	1236年2月21日	御婦座		社頭間門
同七月一日	1236年7月1日			間門ノ開門ノ任例
同廿八日	1236年7月28日	御遷座	金堂前	社頭間門
同年十月廿八日	1236年10月28日			
同年十一月二日	1236年11月2日	御婦座		
正喜(ママ)(嘉)元年五月十一日	1257年5月11日	御動座	移殿	
同七月五日	1257年7月5日	御婦座		
文永元年七月二日亥刻	1264年7月2日	御動座	移殿	
八月二日	1264年8月2日	御遷座	金堂前	
同年九月廿一日	1264年9月21日	御婦座		
建治元年五月十五日亥刻	1275年5月15日	御動座	移殿	
同六月廿二日	1275年6月22日	遷御	金堂前	
八月廿一日戌刻	1275年8月21日	御婦座		
同二年六月八日	1276年6月8日	御動座	移殿	流罪遅々
同十月十日	1276年10月10日	御婦座		
弘安元年七月十日辰刻	1278年7月10日			料理移殿
同廿二日戌刻	1278年7月22日	御動座	移殿	
同廿七日	1278年7月27日	御婦座		
同四年九月廿五日戌刻	1281年9月25日	御進免	泉木津	
同十月二日子刻	1281年10月2日	着御	宇治平等院北門	
同四日	1281年10月4日	着御	稲荷社	
同六日	1281年10月6日	遷御	法成寺	
翌年十二月廿一日	1282年12月21日	御婦座		
正応四年正月十七日	1291年1月17日	御遷座	金堂前	学侶衆徒沙汰
同十九日	1291年1月19日	進免	泉木津	抑留
同二月廿三日	1291年2月23日	御婦座		
同年十二月廿七日	1291年12月27日	御遷座	移殿	
同五年正月十三日	1292年1月13日	着御	金堂前	
同四月廿一日	1292年4月21日	御婦座		
永仁二年十月五日	1294年10月5日	奉入	泉木津	神鏡
同三年五月四日	1295年5月4日	御婦座		
同年十一月廿日	1295年11月20日	法皇御幸		
廿六日還御之刻	1295年11月26日	奉安置	放光院	神鏡
後日			天満社前立仮殿	神鏡
同夜	1295年11月20日		金堂前	
同五年八月廿一日寅刻	1297年8月21日	御婦座	自寺中	
同日巳刻	1297年8月21日	御婦座	自放光院	
正安三年四月五日	1301年4月5日	御遷座	金堂前	断罪
同九月卅日	1301年9月30日	御婦座		
同四年三月十五日	1302年3月15日	御遷座	金堂前	
四月廿六日	1302年4月26日	進免	泉木津	
同六月廿九日	1302年6月29日	御婦座		
乾元々々十二月廿九日	1302年12月29日	御遷座	移殿	
同二年正月十九日	1303年1月19日	御婦座		
嘉元々々八月十八日	1303年8月18日	御遷座	移殿	
同九月十四日ノ即日	1303年9月14日	御婦座		流罪
徳治二年十二月十二日	1307年12月12日	御遷座	泉木津	
同十五日	1307年12月15日	着御	平等院	
同廿日	1307年12月20日	御入洛	入御法成寺金堂前	
同三年七月十二日	1308年7月12日	御婦座		遠流
正和元年四月十三日	1312年4月13日	御動座	移殿	
同十九日	1312年4月19日	着御	金堂前	
同八月廿一日	1312年8月21日	進免	泉木津	
同廿三日	1312年8月23日	遷御	平等院	
同廿五日未刻	1312年8月25日	御入洛		
同戌刻	1312年8月25日	着御	法成寺	
八月十六日(ママ)	1312年8月16日(ママ)	御婦座		
同三年三月十一日	1314年3月11日	御遷座	金堂前	
同十三日	1314年3月13日	遷御	泉木津	
同十四日	1314年3月14日	御進免	平等院	
同十七日	1314年3月17日	御入洛		仮殿

年月日	年(西暦)月日	強訴の形態	場所	備考
自今月八日三十ヶ日	1314年3月8日～		法成寺	触穢
三月十日	1314年3月10日	遷御	法成寺金堂前	
同三年八月十四日	1314年8月14日	御帰座		
文保二年七月十二日子刻	1318年7月12日	御遷座	移殿	
同十三日	1318年7月13日	御帰座		
元応二年二月十四日丑刻	1320年2月14日	御動座	移殿	
同三月十二日	1320年3月12日	御帰座		
元亨(ママ)元年八月六日	1321年8月6日	御動座	移殿	
同廿二日	1321年8月22日	御帰座		
正中二年六月廿四日戌刻	1325年6月24日	御遷座	金堂前	
同十二月十五日	1325年12月15日	御帰座		
嘉暦二年八月廿二日	1327年8月22日	遷座	泉木津	
同九月十二日	1327年9月12日	御帰座		
建武二年六月廿日	1335年6月20日	進発	泉木津	
同七月十一日	1335年7月11日	御帰座		
同三年十一月	1336年11月	御動座	移殿	
同十二月廿六日	1336年12月26日	御帰座		
暦応二年十一月九日	1339年11月9日	御動座	移殿	
同廿二日	1339年11月22日	遷御	金堂前	
同三年六月十九日	1340年6月19日	御帰座		
暦応三年十月廿三日	1340年10月23日	進発	泉木津	
同十二月十三日	1340年12月13日	着御	平等院	
同十九日	1340年12月19日	御入洛	着御下長講堂号六条殿	
同四年八月十九日	1341年8月19日	御帰座		
康永三年十一月十八日	1344年11月18日	遷座	金堂前	
同四年四月十六日	1345年4月16日	進発	泉木津	
同六月廿一日	1345年6月21日	着御	平等院	
同七月十九日	1345年7月19日	御帰座		
貞和三年七月二日	1347年7月2日	御動座	移殿	
同四年正月十二日	1348年1月12日	御帰座		
貞和四年戊子七月八日	1348年7月8日	御動座	移殿	
同八月二日子刻	1348年8月2日	御帰座		
文和四年九月六日	1355年9月6日	御動座	移殿	
翌年正月十二日	1356年1月12日	御帰座		
延文元年七月十二日	1356年7月12日	御遷座	金堂前	
翌年三月四日	1357年3月4日	御帰座		
貞治三年甲辰十一月十五日	1364年11月15日	御遷座	移殿	
同十二月十九日	1364年12月19日	着御	平等院	
同廿一日	1364年12月21日	着御	長講堂六条殿	
同五年八月十二日	1366年8月12日	御帰座		
同十三日	1366年8月13日	着御	本社	
応安四年辛亥十二月一日	1371年12月1日	御入洛	長講堂	
同七年十二月十七日	1374年12月17日	御帰座		四ヶ年御在洛今度始也
永和三年丁巳九月廿六日亥刻	1377年9月26日	御進発	平等院	神木
同廿七日辰刻	1377年9月27日	着御	平等院	
同年十一月廿六日	1377年11月26日	御帰座	自宇治殿	
永和四年戊午十月九日	1378年10月9日	御遷座	金堂前	
翌年康暦元年 <small>（口口口永暦五）</small> 八月十三日	1379年8月13日	御進発	平等院	
同十四日辰刻	1379年8月14日	着御	(平等院)	
同巳刻	1379年8月14日	出御	平等院	
未刻	1379年8月14日	着御	長講堂六条殿	
康暦二年庚申十二月十五日戌刻	1380年12月15日	出御	六条殿	
同丑刻	1380年12月15日	着御	平等院	
十六日午刻	1380年12月16日	出御	平等院	
同亥刻	1380年12月16日	着御	本社	
宝徳三年辛未九月二日	1451年9月2日	御動座	移殿	
同廿四日	1451年9月24日	御帰座		
八月廿四日	1451年8月24日			移殿料理事
廿九日	1451年8月29日			移殿拵事／先例也
九月二日	1451年9月2日	御動座	移殿	
同廿四日／同廿四日戌刻	1451年9月24日	御帰座		社頭開門／長間寺発向
十一月十九日	1451年11月19日		開門	
寛正四年癸未十二月廿四日	1463年12月24日	御動座	移殿	
去十二日	1463年12月12日		七次寺開門	
昨日廿三日	1463年12月23日		社頭開門	
廿三両日	1463年12月22・23日			移殿料理事／先例也
寛正五年甲申卯月十三日	1464年4月13日	御飯座		

※「年(西暦)月日」欄は『日本暦日便覧』上・下(汲古書院、1988年)を利用し、和暦の年数のみを考慮して変換した。